論　文 ニダバ (*Nidaba*) 39(2010), 68-77

日本語・イタリア語対照研究

―語中音添加を中心として―

古　浦　敏　生

§1　はじめに

特定の語に語源に基づかない新たな音が添加される現象は、それが発生する位置によって、語頭音添加（prothesis）・語中音添加（epenthesis）・語末音添加（epithesis）の三種に分類される。

語頭音添加は、たとえば、イタリア語の scuola「学校」の直前に前置詞 in「～において」が置かれる場合、＊in scuola ではなくて in iscuola「学校において」となる際の下線部 i がそれである。この i の添加は、子音が三つ連なるのを（すなわち、n-s-c の連続を）嫌うイタリア語の特質に拠る。

語中音添加は、たとえば、古代ギリシャ語の anēr「男」の単数属格が語幹末母音 ē の消失によって＊anros となり、この-nr-間に d が挿入され、andros となるのがそれである。この下線部 d の添加は、-nr-という古代ギリシャ語にとってやや不自然な音連続を避けるためである。

語末音添加は、たとえば、ラテン語 cantant「彼(女)らは歌う」が cantan を経てイタリア語で cantano となった際の下線部 o がそれである。この o の添加は、イタリア語が開音節を好むことに起因している。

このような音の添加に関して、亀井・河野・千野（1996）p.166 は、“多くの場合、当該言語の話者にとって発音しにくい音結合が生じた場合に起こる”と指摘している。また、大塚・中島（1982）p.183 は“詩行の韻律を整えるために語頭・語中・語尾に余分の音を加えることがある”とも述べている。ここで筆者には、“どんな音が、どんな音的環境において添加されるのか？”という疑問が生じた。

§2　方法論

筆者はここ数年来、日本語とイタリア語との対照研究を推進している。本稿では音韻変化の中でも語中音添加にスポットを当てて、両言語に共通する「添加の生ずる音的環境」と「添加音の種類」とを抽出したいと思う。「語中音添加」の定義であるが、デュボワ, J.

(1980)p.167 に従って、“好音調を保持したり調音を容易にしたりする目的で、あるいは、類推などによって、単語あるいは単語群の中に語源に基づかない音を挿入する現象”としておこう。なお、焦点を「語中音添加」に絞った理由であるが、

①「音の添加」は言語経済の原理に逆らっているためか、用例のバラエティも少なく、比較的整理が容易であること。

②「語中音添加」では、添加音とその前後の音韻という3種の条件が絡み、分析的な面白さがあること、が挙げられる。

用例の収集方法であるが、内外の辞書・文法書に「語中音添加」の例として掲載されているものを可能な限り集めることとした。次節以降、念のためイタリア語の用例末には出自箇所を記しておく。そして、「語中音添加」の生じる箇所にはハイフンを入れておく。なお、この種の研究論文に関しては、現在のところ筆者は未見である。

§3　日本語における「語中音添加」の用例

用例収集に当たって、若干考慮しておくべきことがある。

①外国語を日本語に取り入れる際の用例は除外する。たとえば、英語の spring「春」を日本語に取り入れる際、/s-u-p-u-ring-u/ のようになる。この下線部の /u/ は確かに添加された語中音ではあるが、そもそも /supuringu/ なる語は日本語ではない。

②音が語中に添加されることはあっても、それがいわゆる標準語ではなくて、俗語的・方言的な語・表現であると思われる場合の用例は除外する。たとえば、

◎場合 /ba-ai/ → /ba-y-ai/ または/ba-w-ai/

◎牛蒡 /go-bō/ → /go-n-bō/

◎具合 /gu-ai/ → /gu-w-ai/

◎勢い /iki-oi/ → /iki-y-oi/

◎見合い/mi-ai/ → /mi-y-ai/

◎似合う /ni-au/ → /ni-y-au/

◎幸せ /si-awase/ →/si-y-awase/

◎鳶 /to-bi/ → /to-n-bi/

◎尖る /to-garu/ → /to-n-garu/

◎山姥 /yama-(u)ba/ → /yama-n-ba/

これらの用例のうち、「場合」・「具合」・「勢い」・「見合い」・「似合う」・「幸せ」に関しては、語中の母音接続を避けるために半母音 /w/・/y/ が発生したものと考えられる。

③一見して音が語中に添加されているように思えても、語源的に検討してみると、それが疑わしい場合の用例は除外する。たとえば、

◎亀戸 /kame-do/ → /kame-i-do/（東京都江東区の地名）

この場合、/e/ ～/d/ 間に /i/ が添加されているように見える。しかし、『角川日本地名

大辞典』(1991,p.224)によれば、“「亀村」に「亀ケ井」という古井戸があって、これら（「亀村」と「井戸」）が混交して「亀井戸」となり、のちに語中の漢字「井」が脱落して「亀戸」となったが、音は「かめいど」のまま残った”とする説が指摘されている。

◎由緒 /yu-syo/ → /yu-i-syo/

この場合、/u/ ～/s/ 間に /i/ が添加されているように見える。松村明（2006,p.2576）によれば、“(「ゆいしょ」は)「ゆしょ」の慣用読み”とされているので、語中音添加が考えられる。しかし、金田一京助ほか（1997,p.1420）によれば、“(「ゆいしょ」は）古くは「ゆうしょ」”とされている。だとすれば、/uu/ →/ui / の音変化も予測される。このように、見解の相違も存在するので、この用例も除外することとする。

④音が語中に添加されてはいても、それが古語である場合の用例は除外する。たとえば、

◎荒稲 /ara-ine/ → /ara-s-ine/ (注 1)

◎和稲 /niki-ine/ → /niki-s-ine/ (注 2)

以下、用例を「母音の添加」・「子音の添加」・「モーラ音素の添加」に分け、添加される音韻ごとに提示することとする。用例の掲載はローマ字のアルファベット順とする。なお、用例の一行下に添加の生じた音韻的環境を簡潔にまとめ、直前・直後の隣接音の影響の有無を【有】・【無】の略号で示しておく。

(1) 母音の添加

① /i/ の添加

◎詩歌 /si-ka/ → / si-i-ka /

(/i/ ～/k/ 間に /i/ の添加)【母音＋/ i /＋子音】【有】

② /u/ の添加

◎夫婦 / fu-fu/ → /fu-u-fu/

(/u/ ～/f/ 間に /u/ の添加)【母音＋/ u /＋子音】【有】

(2) 子音の添加

① /k/ の添加

◎亀甲 /ki-kō/ → /ki-k-kō/

(/i/ ～/k/ 間に /k/ の添加)【母音＋/k/＋子音】【有】

② /m/ の添加

◎三位 /san-i/ → /san-m-i/

(/n/ ～/i/ 間に /m/ の添加)【子音＋/m/＋母音】【無】

③ /n/ の添加

◎安穏 /an-on/ → /an-n-on/

(/n/ ～/o/ 間に /n/ の添加)【子音＋/n/＋母音】【有】

◎反応 /han-ō/ → /han-n-ō/

(/n/ ～/ ō / 間に /n/ の添加)【子音＋/n/＋母音】【有】

◎因縁 /in-en/ → /in-n-en/

(/n/ ～/e/ 間に /n/ の添加)【子音＋/n/＋母音】【有】

◎感応 /kan-ō/ → /kan-n-ō/

(/n/ ～/ ō / 間に /n/ の添加)【子音＋/n/＋母音】【有】

◎観音 /kan-on/ → /kan-n-on/

(/n/ ～/o/ 間に /n/ の添加)【子音＋/n/＋母音】【有】

◎親王 /sin-ō/ → /sin-n-ō/

(/n/ ～/ō/ 間に /n/ の添加)【子音＋/n/＋母音】【有】

◎歎異抄/tan-isyō/ →/tan-n-isyō/

(/n/ ～/i/ 間に /n/ の添加)【子音＋/n/＋母音】【有】

◎天皇 /ten-ō/ → /ten-n-ō/

(/n/ ～/ō/ 間に /n/ の添加)【子音＋/n/＋母音】【有】

④ /s/ の添加

◎秋雨 /aki-ame/ → /aki-s-ame/

(/i/ ～/a/ 間に /s/ の添加)【母音＋/s/＋母音】【無】

◎春雨 /haru-ame/ → /haru-s-ame/

(/u/ ～/a/ 間に /s/ の添加)【母音＋/s/＋母音】【無】

◎氷雨 /hi-ame/ → /hi-s-ame/

(/i/ ～/a/ 間に /s/ の添加)【母音＋/s/＋母音】【無】

◎霧雨 /kiri-ame/ → /kiri-s-ame/

(/i/ ～/a/ 間に /s/ の添加)【母音＋/s/＋母音】【無】

◎小雨 /ko-ame/ → /ko-s-ame/

(/o/ ～/a/ 間に /s/ の添加)【母音＋/s/＋母音】【無】

◎三朝 (注 3) /mi-asa/ → /mi-s-asa/

(/i/ ～/a/ 間に /s/ の添加)【母音＋/s/＋母音】【無】

◎村雨 /mura-ame/ → /mura-s-ame/

(/a/ ～/a/ 間に /s/ の添加)【母音＋/s/＋母音】【無】

(3) モーラ音素の添加

① 撥音 /N/ (注 4)の添加

◎備後 /bi-go/ → /bi-N-go/

(/i/ ～/g/ 間に /N/ の添加)【母音＋/N/＋子音】【無】

◎豊後 /bu-go/ → /bu-N-go/ (注 5)

(/u/ ～/g/ 間に /N/ の添加)【母音＋/N/＋子音】【無】

◎真中 /ma-naka/ → /ma-N-naka/

(/a/ ～/n/ 間に /N/ の添加)【母音＋/N/＋子音】【無】

② 強調による促音 /Q/ (注 6)の添加

◎真黒 /ma-kuro/ → /ma-Q-kuro/【母音＋/Q/＋子音】【有】

◎真白 /ma-siro/ → /ma-Q-siro/【母音＋/Q/＋子音】【有】

◎真正面 /ma-syōmen/ → /ma-Q-syōmen/【母音＋/Q/＋子音】【有】

§4 イタリア語における「語中音添加」の用例

(1) 母音の添加

① /e/ の添加

◎ドイツ語 Landsk-necht「(15-17 世紀のドイツで、主として農民から徴募された)徒歩傭兵」→ イタリア語 lanzich-e-necco「(ルネサンス期の) ドイツ人の傭兵」

(/k/ ～/n/ 間に /e/ の添加)【子音＋/e/＋子音】【無】

【Dardano-Trifone, p.417 ; Devoto-Oli, p.808】

◎イタリア語 mercol-dì「水曜日」→ mercol-e-dì「水曜日」

(/l/ ～/d/ 間に /e/ の添加)【子音＋/e/＋子音】【無】

【Gabrielli, p.246】

◎イタリア語 simil-mente「同様に」→ simil-e-mente「同様に」

(/l/ ～/m/ 間に /e/ の添加)【子音＋/e/＋子音】【無】

【Ceppellini, p.175】(注 7)

◎イタリア語 umil-mente「慎ましく」→ umil-e-mente「慎ましく」

(/l/ ～/m/ 間に /e/ の添加)【子音＋/e/＋子音】【無】

【Gabrielli, p.246 ; Palazzi, p.494】(注 7)

② /i/ の添加

◎ラテン語 as-(th)ma「喘息」→ イタリア語 ans-i-ma「息切れ」

(/s/ ～/m/ 間に /i/ の添加)【子音＋/i/＋子音】【無】

【Tekavčić , p.214】

◎ラテン語 baptis-mus「洗礼」→ イタリア語 battes-i-mo「洗礼」

(/s/ ～/m/ 間に /i/ の添加)【子音＋/i/＋子音】【無】

【De Felice-Duro, p.679 ; パトータ, p.94】

◎プロヴァンス語 blas-mar → bias-mare → イタリア語 bias-i-mare「非難する」

(/s/ ～/m/ 間に /i/ の添加)【子音＋/i/＋子音】【無】

【パトータ, p.94】

◎イタリア語 fantas-ma「幽霊」→ fantas-i-ma「幽霊」

(/s/ ～/m/ 間に /i/ の添加)【子音＋/i/＋子音】【無】

【Gabrielli, p.246 ; Garzanti, p.611 ; Zingarelli, p.700】

◎ドイツ語 Lands-knecht「(15-17 世紀のドイツで、主として農民から徴募された)

徒歩傭兵」→ イタリア語 lanz-i-chenecco「(ルネサンス期の) ドイツ人の傭兵」

(/ts/ ～/k/ 間に /i/ の添加)【子音＋/i/＋子音】【無】

【Dardano-Trifone, p.417 ; Devoto-Oli, p.808】

◎ラテン語 spas-mus「痙攣」→ イタリア語 spas-i-mo「苦痛、苦悩」

(/s/ ～/m/ 間に /i/ の添加)【子音＋/i/＋子音】【無】

【パトータ, p.94】

(2) 子音の添加

① /n/ の添加

◎ラテン語 a-s(th)ma「喘息」→ イタリア語 a-n-sima「息切れ」

(/a/ ～/s/ 間に /n/ の添加)【母音＋/n/＋子音】【無】

【Tekavčić, p.214】

◎ラテン語 hi-bernus「冬の」→ イタリア語 i-n-verno「冬」

(/i/ ～/v/ 間に /n/ の添加)【母音＋/n/＋子音】【無】

【Dardano-Trifone, p.417 ; Dubois, p.108】

◎ラテン語 Vice-tia「(北伊の町) ウィーケーティア」→ イタリア語 Vice-n-za「ヴィチェンツァ」

(/e/ ～/ts/ 間に /n/ の添加)【母音＋/n/＋子音】【無】

【Tekavčić, p.215】

② /r/ の添加

◎ラテン語 ballist-a「石弓」→ イタリア語 balest-r-a「石弓」

(/t/ ～/a/ 間に /r/ の添加)【子音＋/r/＋母音】【無】

【Tekavčić, p.214】

◎ラテン語 genist-a「エニシダ」→ イタリア語 ginest-r-a「エニシダ」

(/t/ ～/a/ 間に /r/ の添加)【子音＋/r/＋母音】【無】

【Tekavčić, p.214】

◎古代ギリシャ語 skelet-ós「木乃伊」→ イタリア語 schelet-r-o「骸骨」

(/t/ ～/o/ 間に /r/ の添加)【子音＋/r/＋母音】【無】

【Tekavčić, p.214】

③ /v/ の添加

◎ラテン語 Genu-a「(北伊の町)ゲヌア」→ Geno-a → イタリア語 Geno-v-a「ジェノヴァ」

(/o/ ～/a/ 間に /v/ の添加)【母音＋/v/＋母音】【無】

【Dardano-Trifone, p.417 ; Devoto-Oli, p.808 ; Tekavčić, p.215 ; パトータ, p.94】

◎ラテン語 Io-(h)annes「ヨハネス」→ イタリア語 Gio-v-anni「ジョヴァンニ」

(/o/ ～/a/ 間に /v/ の添加)【母音＋/v/＋母音】【無】

【パトータ, p.94】

◎ラテン語 Mantu-a「(北伊の町)マントゥア」→ Manto-a → イタリア語 Manto-v-a「マントヴァ」

(/o/ ～/a/ 間に /v/ の添加)【母音＋/v/＋母音】【無】

【Tekavčić, p.266 ; パトータ, p.94】

◎ラテン語 manu-alis「手の」→ mano-ale → イタリア語 mano-v-ale「職人」

(/o/ ～/a/ 間に /v/ の添加)【母音＋/v/＋母音】【無】

【Tekavčić, p.266 ; パトータ, p.94】

◎ラテン語 ru-ina「破滅」→ ro-ina → イタリア語 ro-v-ina「破滅」

(/o/ ～/i/ 間に /v/ の添加)【母音＋/v/＋母音】【無】

【Devoto,p.366】

◎ラテン語 vidu-a「未亡人」→ vedo-a → イタリア語 vedo-v-a「未亡人」

(/o/ ～/a/ 間に /v/ の添加)【母音＋/v/＋母音】【無】

【Tekavčić, p.266 ; パトータ, p.94】

§5 用例の分析と結果

(1) 母音の添加

母音としては /e/ ・/i/ ・ /u/ の添加が見られる。/e/ の添加はイタリア語にのみ存在し、【子音＋子音】間で生じている。/i/ の添加は、日伊両言語ともに存在する。但し、日本語では【母音＋子音】間で、イタリア語では【子音＋子音】間で生じている。/u/ の添加は日本語にのみ存在し、【母音＋子音】間で生じている。

(2) 子音の添加

子音としては /k/・/m/・/n/・/r/・/s/・/v/ の添加が見られる。/k/ の添加は日本語にのみ存在し、【母音＋子音】間で生じている。/m/ の添加も日本語にのみ存在し、【子音＋母音】間で生じている。/n/ の添加は日伊両言語ともに存在する。但し、日本語では【子音＋母音】間で、イタリア語では【母音＋子音】間で生じている。/r/ の添加はイタリア語にのみ存在し、【子音＋母音】間で生じている。/s/ の添加は日本語にのみ存在し、【母音＋母音】間で生じている。/v/ の添加はイタリア語にのみ存在し、【母音＋母音】間で生じている。

(3) モーラ音素の添加

モーラ音素 /N/・/Q/ の添加は日本語にのみ存在し、【母音＋子音】間で生じている。

§6 まとめ

前節の結果を踏まえて一覧表（次ページ）を作成し、最後に、本稿で明らかになった結果を箇条書きにしておこう。

①日伊両言語において語中で添加される音は5〜8種類と僅少である。このうち、共通して添加される音は /i/ と /n/ である。

② /i/ の語中音添加は、日本語では【母音＋子音】間で、イタリア語では【子音＋子音】間で生じている。

③ /n/ の語中音添加は、日本語では【子音＋母音】間で、イタリア語では【母音＋子音】間で生じている。

④日本語で生じている /m/・/s/ の語中音添加はイタリア語では見られない。

⑤イタリア語で生じている /e/・/r/・/v/ の語中音添加は日本語では見られない。

⑥モーラ音素 /N/・/Q/ の添加は、モーラ言語ではないイタリア語では当然見られない。

⑦日本語では【母音＋子音】の音韻的環境に語中音添加が集中する傾向がある。これに対して、イタリア語では偏りの無い音韻的環境で（すなわち、【母音＋母音】・【母音＋子音】・【子音＋母音】・【子音＋子音】のいずれの環境でも）語中音添加が生じている。

⑧「語中の添加音」と「(その添加音に隣接する)直前・直後の音」との関係であるが、イタリア語では、添加音は隣接音の影響を全く受けていない。他方、日本語では、添加音が隣接音の影響を受けて重複する場合（たとえば、/n/・/Q/。用例末の【有】を参照）と、無関係の場合（たとえば、/s/・/N/。用例末の【無】を参照）との両者が共存している。

音韻的環境		母音＋母音	母音＋子音	子音＋母音	子音＋子音
母音の添加	/e/				伊語
	/i/		日本語		伊語
	/u/		日本語		
子音の添加	/k/		日本語		
	/m/			日本語	
	/n/		伊語	日本語	
	/r/			伊語	
	/s/	日本語			
	/v/	伊語			
モーラ音素の添加	/N/		日本語		
	/Q/		日本語		

注

(注 1)『広辞苑』によれば、“外皮を去らぬ米、籾のこと”とある。

(注 2)『広辞苑』によれば、“籾を摺り去った稲の実のこと”とある。

(注 3)「三朝」は鳥取県東伯郡の町名である。溝手理太郎(2001,p.241)によれば、“「三朝」はミ(接頭語)アサ(崩壊地形)の転で「河川に浸された急崖」のことであろう”とされている。他方、吉田茂樹(2005, p.250)によれば、“「三朝」は平安前期(『和名抄』)には「三朝郷」として現れる。三徳川の浅瀬をミアサ(水浅)と呼んだのであろう”とされている。いずれにせよ、「ミ」と「アサ」との間にsが添加されたものと考えられる。

(注 4) 現代日本語の表記では「ん」・「ン」の仮名が当てられる音節のこと。「はねる音」とも言われる。

(注 5)「豊」を/bu/とする読み方であるが、「豊前 /buzen/ 」を参照のこと。

(注 6) 現代日本語の表記では「っ」・「ッ」の仮名が当てられる音節のこと。「つまる音」とも言われる。音声レベルでは多様な実現をするが、いずれも単一音素と解釈される。なお、§3 の③で触れるべきであったかもしれないが、真青 /ma-ao/ →/ma-s-ao/ →/ma-Q-s-ao/ の場合、/a/ ～/a/ 間に /Q-s/ が添加されているように見える。しかし、金田一春彦(1967, p.65)によれば、“『万葉集』に「さ青」という言葉があり、これに「真」がついたのかもしれない”とされているので、用例から外すこととした。

(注 7) イタリア語では-leで終わる形容詞から副詞を派生させる場合、語末の-eを落として-menteを付すのが通例である。たとえば、amabile「愛すべき」→amabilmente「愛らしく」。

参考文献

池田廉ほか編(1999):『伊和中辞典』第2版、小学館

石黒昭博ほか編(1996):『現代の言語学』金星堂

大塚高信・中島文雄監修(1982):『新英語学辞典』研究社

風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健(1993):『言語学』東京大学出版会

『角川日本地名大辞典』編纂委員会(1991):『角川日本地名大辞典』第13巻「東京都」

亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996):『言語学大辞典』第6巻、述語編、三省堂

金田一京助(1963):『新訂・増補　国語音韻論』刀江書院

金田一京助ほか編(1997):『新明解国語辞典』第5版、三省堂

金田一春彦(1967):『ことばの博物誌』文芸春秋㈱

古浦敏生(1987):『イタリア語文法小事典』(『広島大学文学部紀要』第46巻、特輯号3)

国語学会編(1966):『国語学辞典』東京堂

国語学会編(1991):『国語学大辞典』東京堂

田中春美編集主幹(1988):『現代言語学辞典』成美堂

田中春美ほか(1977):『言語学入門』大修館

デュボワ,J.ほか著、伊藤晃ほか編訳(1980):『ラルース言語学用語辞典』大修館

パトータ・ジュゼッペ著、岩倉具忠監修、橋本勝雄訳(2007):『イタリア語の起源――歴史文法入門』京都大学学術出版会

飛田良文ほか5名編（2007）:『日本語学研究事典』明治書院
松村明編（2006）:『大字林』第3版、三省堂
溝手理太郎（2001）:『市町村名語源辞典』東京堂
吉田茂樹（2005）:『日本地名大事典』下、新人物往来社
Ceppellini,V.（1962）: *Dizionario grammaticale per il buon uso della lingua italiana*,4ª ed. Novara
Dardano, M. & Trifone, P.（1990）: *La lingua italiana*, Bologna
De Felice, E. & Duro, A.（1976）: *Dizionario della lingua e della civiltà italiana contemporanea,* Palumbo
Devoto, G.（1987）: *Avviamento alla etimologia italiana*, Firenze
Devoto, G. & Oli, G. C.（1987）: *Dizionario della lingua italiana*, Firenze
Dubois, J. ed altri（1983）: *Dizionario di linguistica*, Bologna
Gabrielli, A.（1961）: *Dizionario linguistico moderno*, 3ª ed. Milano
Garzanti, A.（1974）: *Dizionario Garzanti della lingua italiana*, 12ª ed. Milano
Palazzi, F.（1975）: *Novissimo dizionario della lingua italiana*, ed. a cura di G.Folena Milano
Tekavčić, P.（1972）: *Grammatica storica dell'italiano*, vol.1 : fonematica, Bologna
Zingarelli, N.（1983）: *Il nuovo Zingarelli——vocabolario della lingua italiana,* 11ª ed. Bologna

付記

本稿執筆に際して、広島大学名誉教授、室山敏昭先生と広島大学大学院教授、今田良信先生から貴重なご教示を賜った。厚くお礼申し上げたい。なお、日伊両言語にわたって語中音添加の用例を網羅的に収集することは非常に困難であるので、今後とも収集の努力を続けていきたいと思う。